

## 日瑞音楽交流2010：スウェーデン訪問による

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子, 新井, 和康, 伊東, 千明, 大庭, 郁穂, 鈴木, 千晶, 下田, 太一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/7186">http://hdl.handle.net/10297/7186</a>

## 日瑞音楽交流 2010 —スウェーデン訪問による—

音楽教育講座 小西潤子 新井和康 伊東千明  
大庭郁穂 鈴木千晶 下田太一

### はじめに

本プロジェクト(略称 PSJM2010)は、2008年7月に日瑞音楽留学基金(加勢園子理事長、スウェーデン在住)が小西潤子(静岡大学)、土野研治(日本大学)らに呼びかけ、定期的に日瑞の音楽専門家と学生が両国を訪れ交流することによって、相互の音楽文化に関する知識を深め、専門分野における能力を高めることをめざして立ち上げたものである。第1回目の事業となった PSJM2009 では、スカンジナビア・ニッポン・ササカワ財団より助成(No.09-20)、静岡大学国際交流センター助成を受け、来日したスウェーデンの音楽家らによる演奏会等を静岡大学教育学部および人文学部地域社会文化研究ネットワークセンターの主催事業として実施し、大学会館で学外へも公開した。具体的には、ヴァイオリニスト・フーゴ・チッティアーティ氏(リラ音楽院)とマリアンヌ・ヤコブス氏(マルメ音楽院)による演奏会、アニータ・グランベルイ氏(インゲスンド音楽大学)によるFMT脳機能回復音楽療法講演会を行った。

2年目となる PSJM2010 では、2010年9月12日より9月20日まで静岡大学大学院教育学研究科で音楽を専攻する修士課程の2年生5名が小西潤子と共に訪瑞した。現地では先にヨーロッパ入りしていた土野研治氏(日本大学芸術学部)と合流して、加勢園子氏(日瑞音楽留学基金理事長)のコーディネートにより、関係諸機関で日本の音楽事情を伝える目的で講義やコンサートなどを行い、民俗音楽などによる学生間の交流を行った。また、FMT脳機能回復音楽療法の授業に参加したり、文化行政官より聞き取りを行ったりして、現地音楽事情への見識を高めた。訪問に先立って、小嶋遼(芸術文化課程音楽文化専攻)の協力を得て手作りのグリーティング・カードとしおりを作成した(巻末参照)。

(小西)

### 1. 日程概要

成田空港に集合し、空路でバンコク経由、コペンハーゲンに入り、鉄道でスウェーデンマルメ市に入った。次に、現地での日程概要を示す。

9月12日(日)

コペンハーゲン経由マルメ到着、ヤコブス国立マルメ音楽院准教授と演奏打ち合わせ

9月13日(月)

午前 ヤコブス准教授より学内施設の案内、打ち合わせ、民俗音楽専攻授業見学  
ランチタイム 土野・日本大学教授による日本歌曲コンサート

午後 小西・静岡大学准教授による講義、静岡大学生による日本音楽コンサート  
夕方 スウェーデンの歌曲レッスン、ヤコブス准教授によるピアノレッスン



写真1 ヤコブス氏宅での打ち合わせ



写真2 日本音楽コンサートのフィナーレ

9月14日(火)

午前 国立マルメ音楽院でリハーサル、民俗音楽専攻授業見学

ランチタイム 静岡大学生とマルメ音楽院学生の交流コンサート

午後 市立マルメ文化学校見学、マルメ音楽院教員とのディスカッション



写真3 民俗音楽学生との交流コンサート

9月15日(水)

午前 ストックホルム・リラ音楽院にて静岡大学生による模擬授業

午後 ナッカ市生涯学習課 Staffan Ström 氏、政治家 Tobias Nessen 氏と会談

夕方 フーゴ・ティチャーティ氏のヴァイオリン・コンサート



写真4 模擬授業での篠笛演奏

9月16日(木)

午前 ピアノおよび声楽のレッスン

午後 小西・静岡大学准教授によるレクチャー、静岡大学生によるコンサート

夕方 土野研治・声楽コンサート「共鳴」伴奏者

下田太一、鈴木千晶



写真5 S. シェイヤ王立音楽院教授によるレッスン

9月17日(金)

午後 イングスンド音楽大学にて FMT の授業参加(コード演奏について)

夕方 土野・日本大学教授による日本の音楽療法実践例紹介

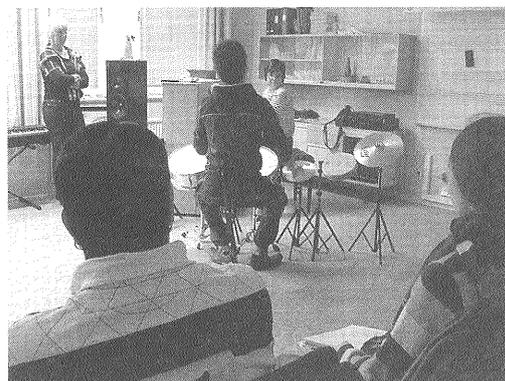


写真6 FMT 音楽療法を体験

9月18日(土)

午前 FMT の授業(ビデオスタディ)

午後 小西・静岡大学准教授のセミナー、イングスンド大学生による民俗音楽の紹介  
ジャスティンとカーリンに伝統的な歌を教えてもらう

夕方 静岡大学生によるコンサート、学生間の音楽交流



写真7 学生間音楽交流

9月19日(日)

午前 イングスンド大学発

午後 ストックホルム到着、ストックホルム市内散策

9月20日(月)

午前 ストックホルム空港出発

(伊東)

## 2. 演奏曲目

音楽交流の大きな柱として、静岡大学生による演奏があった。大学院生とはいえ、ピアノ（鈴木、下田）、声楽（伊東、大庭）、音楽学（新井）と専攻が異なり、日常的に合同演奏する機会はない。それどころか、日本の音楽事情を紹介するといっても、篠笛を個人的に学んでいる音楽学の新井を除くとそれぞれが学んでいるのは西洋音楽であって、箏や三味線といった日本の楽器演奏や邦楽の発声法を実践できるわけではなかった。その中で、実際に演奏の練習を始めるよりも、何を演奏するのかという企画に時間をかけた。

そして、付け刃のように邦楽をやるのではなく、幅広いジャンルからなる日本の音楽作品を取り上げることにした。すなわち、日本で生まれた西洋音楽との折衷音楽（いわゆる「日本歌曲」や民謡をテーマにしたピアノ作品など）を中心にすること、篠笛についても専門性を極めているわけではないので、洋と和の融合を表現するポピュラー風の篠笛とピアノの作品にすること、世界的に人気のあるアニメソング《もののけ姫》を取り入れて日本の今の音楽文化を紹介すること、最後には参加者も楽しめるように《アンパンマン体操》をうたいながら踊ることとした。また、小西による講演内容もこれらの演目への理解を深めるものとした。そして、各地でそれぞれの事情に合わせて演奏曲目を微調整した。その結果をまとめたものが次の表1である。

表1 演奏演目一覧

9/13 mon. 15:00-17:00	9/14 tue. 12:15-13:00	9/16 thu. 12:30-13:15	9/17 fri.	9/18 sat. 19:30-20:30
1,荒城の月 2,むこうむこう 3,さくらさくら 変奏曲 4,日本の四季(秋、冬) 5,Fish dance 6,星のさえずり 7,もののけ姫	1,むこうむこう 2,日本の四季(冬) 3,星のさえずり 4,アンパンマン 体操 ※マルメ音楽院 の学生との合同 コンサート	1,荒城の月 2,むこうむこう 3,さくらさくら 変奏曲 4,日本の四季(秋、冬) 5,Fish dance 6,星のさえずり 7,もののけ姫	※都合により中止	1,むこうむこう 2,日本の四季(冬) 3,Fish dance 4,もののけ姫 ※アンコールとして、「富士山」 ※土野教授と合同

(下田)

### 3. 国立マルメ音楽院での活動

9月13日（月）

スウェーデンの滞在中は、朝方は雨降りで気温が低く肌寒いですが、午後は晴れて上着を脱ぐくらいまで暖かくなり、夕方から急に冷え込み、コートとストールが手放せない、という急な気温の変化が続いた。夏なのか、冬なのか、よくわからないといった状況である。学生を見ると、ニットのセーターにブーツを履いている者もいれば、靴を履かずに素足で、半そでのTシャツをさらりと着て、ヨーロッパの民族衣装を思わせる格好の者もいた。みな誰かの真似をするわけでもなく、こうでなければならぬというようなしなごらみはまったく感じられず、各々の思うままに自由なスタイルであったように思う。

民族音楽専攻の学生の授業を見学した。1日目は「Huayno」というペルー、アンデス地方の舞曲と、ブルガリアの「Bulgarisk slinga」の2曲をレッスンした。10人の学生が円になり、自分の演奏できる楽器を持ち寄っていた。ボーカルが3人、アコースティックギター、バイオリン、スウェーデン民族楽器のバイオリン、アコーディオン、シタール、ブラジルのパーカッション、エレキベースとさまざまで、普段は聴くことのできないオーケストラのハーモニーだった。ここで印象的なのは、生徒は誰一人楽譜を見ていない点である。教授がバイオリンで旋律を区切って弾くと、耳で聞いたメロディーを即座に口で歌って覚えているのである。数名の生徒は歌いながらハンドサインを表していた。16小節の楽曲を数分も経たずにすらすらと覚えると、次は好きなようにコード伴奏を付け、ハーモニーのパートをアドリブで弾いていた。パーカッションやベースは音楽の世界に浸るかのようリズムをひたすら弾き続けていた。誰かが指揮を執るわけでもなく、自然にアンサンブルが出来上がって行って、聴いている自分も自然とリズムに乗って体がうきうきしてきた。ある程度弾けるようになると、次は足のステップをつけて踊りながら演奏を始めた。私たち聴衆は手拍子のリズムを教わって、一緒に曲に参加することができた。楽譜を使わずにこれだけスムーズに演奏が身に付いているのには驚いた。話を聞くと、中には五線譜を読めない生徒もいるようだ。しかしながら、持ち前のリズム感とハンドサインを使った音程の感覚、さらには音楽への積極的な気持ちを持って授業の時間内でアンサンブルはかなりの出来上がりをみせた。日本ではこんなにはやく展開できるだろうか。

夕方には、音楽教育の教授が急きょスウェーデンの歌曲を3曲教えてくれることになった。そして、国民なら誰でも知っている「Vem kan segla」を斉唱した。これを私たちのコンサートのプログラムに加えることになり、その場で歌詞を2番まで必死に練習した。この先、各地のコンサートで最終曲に披露して、観客から暖かい拍手を受け、さらにはお客さんを含め全員で合唱し、うれしかった。とてもきれいな旋律で、歌詞は日本人にも通じる内容で、スウェーデンという遠く離れた国で、音楽を通じて初対面の方々と心が通じたような気がした。

9月14日（火）

授業が始まるまでの間、ほんの数分間、土野先生とコンサートの伴奏合わせをした。

民族音楽の授業、今日は別の楽曲のアンサンブルで、何回かレッスンを重ねている曲だった。ブルガリアの民族舞曲で、本時は、強弱をつけて曲にメリハリが生まれた。静かでおだやかな部分と、強く激しい部分に分かれていて、入れ替わるタイミングや全員で呼吸を合わせるところに時間をかけていた。ボーカルは、西洋のクラシックの発声とは異なる発声法で、意識して使い分けているようだ。日本の教育でも、いわゆる「きれいな発声」だけで歌を歌うのではなく、演歌やホーミー、各地の民謡など、歌曲のジャンルを増やしてそれぞれの歌い方を教えたら、幅が広がるのではないだろうか。

ランチコンサートでは、マルメの生徒もポルカや舞曲を演奏し、音楽の交流ができた。ここで気づいたのは、日本人は生真面目で、一生懸命に音楽を演奏していること。マルメの生徒は、楽譜の忠実さや真剣な表情はもちろんであるが、それは土台に過ぎず、リズムに体全体を乗せていき、アンサンブルならメンバー全員とリズムを共有すること、そして何より楽しく、明るく演奏していた。ポピュラー音楽の生徒であったからなおさら目立ったのかもしれないが、とてもリズム感が良かった。全員が足踏みし、少し耳に付くくらい大きさでリズムをとっていた。

続いてマルメ市立文化学校を見学した。1970年にマルメ市文化局に附属して設立され、マルメ市に住む7歳から19歳までの子どもの約20%が通っている。まるで放課後の習いごとのようであった。公立の音楽教育の学校システムは日本にはないため、うらやましく、とても興味深かった。スウェーデンが音楽教育にどれだけ力を入れているかを目の当たりにすることができた。

生徒は1人5000~6000円の負担で1つの楽器を習うことができ、その他の資金は税金で補われている。文化学校の音楽教師が出張で基本学校の音楽の授業を教えることもある。現在マルメ市の人口の40%は移民で、デンマーク、中東、中国人が多いという。そのため、スウェーデンの子どもにはイランのペルシャ民族楽器が、中東出身の子どもにはピアノが人気だそうだ。ダンスのレッスンでは、宗教上の理由により男女で手をつないではいけないなどの禁止事項があり、保護者との相談が大事だと聞いた。互いに国際理解を深めていく点で、音楽教育は非常に重要であると感じた。

ディスカッションでは基本学校（小学校、中学校、高等学校）の音楽の授業の話になった。小学校はピアノの調律が十分でなく、文化学校に比べて設備が行き届いていないことが問題になった。また、ピアノを家庭に購入するのを拒む保護者が多く、子どもが家で練習できないという。ピアノの調律は800クローネ（約10400円）と比較的安価ではあるが、メンテナンスや楽器のスペースの利便性から電子ピアノの普及率が上がっていることがわかった。これは日本の家庭と同じである。文化学校のシステムが日本にもあれば、気軽に良い音楽教育を受けさせられると感じた。しかし、国や市の財源で運営するとなると、実現するにはかなりの時間がかかりそうだ。

(鈴木)

#### 4. スウェーデンの小学生への授業ーリラ・アカデミーにてー

9月15日(水)

授業はさまざまな不安と向き合いながら計画、展開していかなければならないものですが、今回は初めて行く国で、しかもどのような場所で、どのような子どもたちに授業をするのかという情報もなく、さらに大きな不安を伴いました。しかし、その不安を一つずつ解消していく過程が今回学んだ大切なことです。授業を計画する上でもっとも大切になることはコンセプトです。子どもたちがそこで何を学ぶのか、それを学んだことでその後の生活にどのような影響を与えていくのか。子どもたちの様子がわからない分、よりいっそうの想像力を働かせる必要がありました。スウェーデンの小学生に授業をすることが決まったとき、最初に考えたことは子どもにとって外国人である私の授業を受けるとはどのような気持ちになるだろうかということでした。私が小学生のときに、英語の授業でイギリス人の先生が来たことがありましたが、その存在が新鮮だったことをよく覚えています。特に日本とスウェーデンでは具体的なイメージはお互いに無いと思ったので、これは子どもたちと日本との出会いのきっかけになるのだという思いで挑みました。題材は日本のわらべ歌を取り上げることにしましたが、これは子どもたちに、日本の同年代の子どもたちと音楽を通じて共感してもらうという目標を立てたからです。自らの教育実習の際にも、わらべ歌を題材に授業を展開したこともあり、それらを体を動かしながら歌うことで、独特の拍子感と日本語の語感を感じられるのではと考えました。

いざ授業を始めようとする、それは動揺の連続でした。教室は私が想定していた構造のどれにも当てはまりませんでした。机が移動できる状態ではないことは想定内でしたが、それ以上に隣の人との距離の遠さに驚きました。できれば全員が輪を作って歌う、それができなくともグループワークができればと思っていましたが、教室がそのようなことができる構造ではありませんでした。今思えば、日本よりも個々人のスペースがしっかりと確保されていたといえます。不安を抱えながらも授業は始まります。最初に取り上げた歌は「あんたがたどこさ」です。始めに私が歌って見せます。教育実習のときは子どもたちも聞いたことがあるためか、とても興味をもってこの歌を聴いていましたが、今回は興味をもってというよりも、どちらかというと呆気にとられていたという言い方が正しいと思います。今思えば、私自身子どもたちが「あんたがたどこさ」を歌うことによってどのように感じるかということは想像できていたのですが、初めて聞いてどのように思うかは具体的には想像できていませんでした。また、この歌が子どもたちにとっては難しいだろうということはわかっていました。まず言葉が難しいだろうし、なによりアクセントの位置が規則的ではないため、簡単には歌えないのではないかと想定していました。そしてその難しさこそが子どもたちにとって学ぶべき課題になると思っていました。しかし、歌の習得を容易にするために歌詞を見せるということを考えていましたが、そのことを忘れてしまい先生方に促されて歌詞を提示することができました。もうすこしスムーズに提示できていれば、と反省しています。歌の拍子感を明確にするために、毬つきを手拍子で

代用して歌いましたが、やはり難しいようでした。しかし、口伝えでありながらすぐに歌えるようになっていき、彼らの音楽性の高さに驚かされました。歌えるようになる過程で拍子感や日本語の語感を感じてくれたら、今回の目標は達成されたのかなと思います。

次に取り上げた歌は「おちゃらかほい」です。この歌は多くの国々で共通している「じゃんけん」の歌であること、また「おちゃらか」や「ほい」など、少ない言葉でしかもそれらが響きとして面白いことから取り上げてみました。授業の中で紹介すると、子どもたちの反応が先ほどとはまるで違いました。言葉の面白さ、相手と手を叩き合う動き、じゃんけん、様々なことが子どもたちの関心を引き出したのだと思います。授業が終わった後も、子どもたちが「おちゃらかほい」をしている姿を見て、やってよかったなあという思いになりました。「おちゃらかほい」は後半に取り上げたため、時間が少なかったことは残念でした。

今回の「あんたがたどこさ」と「おちゃらかほい」の子どもたちの反応の違いは、日本においても教材をどのように提示するかという課題に対するヒントになるでしょう。意図したことではないのですが、2つの歌に対する子どもたちの反応が両極端に分かれたことが、今回の収穫の一つでもあります。



写真8 「おちゃらかほい」をする子どもたち

準備、実際の授業とも難しい挑戦であり、反省点や問題点が多くありました。しかし、私が成長できたと感じられたことは、授業の良し悪しは言語の問題ではないということです。言葉でのコミュニケーションの大切さ以上に、授業の展開や題材の提示の仕方の工夫や、どのようなコンセプトを持つかということを確認にすれば、言葉はさほど重要ではないと思います。もし日本であれば、気づくことができなかつたでしょう。

またこれまでの日程において大学の授業を見学する機会を得られましたが、そこで「聴く」ということの重要性を感じていました。当初、授業の中で楽譜を用いるかどうか迷いましたが、スウェーデンの授業風景を見たことによって迷いをなくすことができました。また授業での子どもたちの様子、その後の別の教室の様子等、全日程を通して聴くことの重要性を感じました。それは音楽を知り、学ぶ上で最も基本的かつ重要なことであり、日本の音楽教育においても改めて見直さなければならない点だと思います。

今回のプログラムの最後の夕食で、加勢先生から「この経験は今すぐでなくとも後になって生きてくるでしょう」と言われました。今回得られた反省点や問題点は、私のこれからの音楽活動で直面するであろう問題において、解決の糸口になるような、貴重なものになるだろうと思えるものでした。

(新井)

## 5. ナッカ市の生涯学習課 Staffan Ström 氏、文化政策担当議員 Tobias Nessen 氏と会談

9月15日（水）

この日はストックホルム、ナッカ市の文化政策について2人の形からお話を伺いました。スウェーデンにおける、市民が音楽を学ぶことに対する行政の手厚いサポートの実態は、私の想像を超えるものでした。日本とスウェーデンの違いはなんだろうかと思いましたが、最も大きな違いは政治家自身が音楽の素晴らしさを知っており、音楽が人々の生活に潤いを与えるということを信じているということだと思います。しかし日本では音楽は振興されるどころか、係る予算の削減や学校での音楽の授業時数の実質的削減などが行われています。



写真9 文化政策担当議員 Tobias Nessen 氏と会談

音楽を聴いたり、楽器を演奏したりしてどのような意味があるのか。具体的に説明することは抽象的な表現に頼らざるをえないことはどの国でも同じことだと思います。しかしスウェーデンが市民の音楽学習に対して、音楽学校の授業料負担や私立学校への助成ができているということは、政治家自身の音楽への愛情と市民の理解があるからだと思います。日本の政治家も音楽を愛好し、大切さを認識しているでしょう。しかしスウェーデンのように行政が音楽を振興できるようにするためには、音楽に関わる我々が社会全体が音楽を大切にすることができるようになることをイメージしながら、音楽教育を始めとする活動に励んでいかなければならないと思います。今回、我々がそのような社会の一つのモデルを直に見ることができたことによって、日本の音楽教育の世界において一歩リードできたのではないだろうかと思えました。

（新井）

## 6. リラ・アカデミーの高校生対象のレクチャーとコンサート

9月16日（木）

この日はレクチャーとコンサートを開催しました。前回までに行った2回のコンサートは大学生以上の年齢層が対象でしたが、今回の聴衆は全て高校生ということでどのような反応が返ってくるか（主にアンパンマン体操に関してですが）、楽しみにしていました。

本番は、とにかく思い切りやろうという思いであまり聴衆の様子を把握することができませんでしたが、終わった後のアンコールの手拍子で聴衆の心を掴むことができたのだということを確認しました。アンコール用にスウェーデンの歌を用意していましたが、すぐに歌ってしまっていたということも幸いし、もう一度アンパンマン体操を、今度は一緒に踊ることにしました。

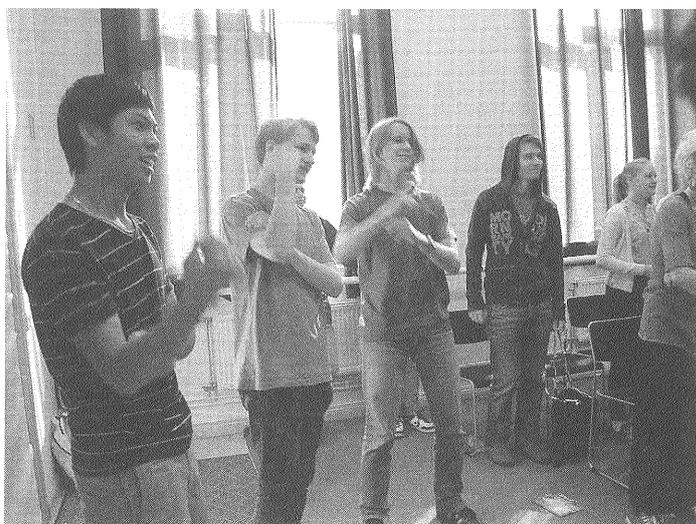


写真10 「アンパンマン体操」を踊る高校生

動きは決して簡単ではなく一度や二度で覚えられるようなものではありませんが、我々と高校生たちの情熱が重なり、会場総立ちの中コンサートを終えることができました。高校生たちはどんな期待を持ってこのコンサートを聴きにきたのでしょうか。おそらく、アンパンマン体操を踊るような展開は予期していなかったでしょう。終わった後、何人かがコンサートについて Interesting と言ってくれました。Good や Great といった言葉ではなく、Interesting という感想を持ってもらえたということは、日本の音楽を取り巻く「今」の面白さを感じてくれたことになったのではないのでしょうか。

（新井）

## 7. マスタークラスを受講して

9月13日(月)(マルメ音楽院マリアンヌ・ヤコブス准教授)

私は、モーツァルトのピアノ・ソナタ第10番ハ長調 K.330 をレッスンしてもらった。レッスンの形式は、日本でのものと特に変わりはなく、まず生徒が楽曲を通して弾き、その後、先生が改善点を指導していくという流れで行われた。レッスンを始める前にタッチに関する問題提起があった。打鍵をする際に、手を上から下へ落下させて打鍵するとその前後の音との関連性が失われてしまう(Marianne 教授曰く、ソ連式の打鍵方法)。そうではなくて、打鍵した後、手を上へ抜くようにすることで、前後の音を関連させることができるという内容の話だった。

その後のレッスンでも、音と音楽の流れに関することを中心とした内容の指導を受けた。特に印象に残っていることは、和声の終止形の扱い方についてだった。トニック→サブドミナント→ドミナント→トニックの流れの中で、ドミナントに一番緊張感を持たせ、トニックに戻すことで、音楽をととても自然でわかりやすく表現することができる(とりわけ、古典派の作品の場合)という話をされた。しかし、私は、そのことは知っていた。では、なぜ言われたのかを考えると、そのことについて頭でわかっているつもりになっていただけで、演奏に反映されていなかったからだろう。そもそも、楽曲分析をする際に、楽曲を構成する要素としての和声の占める割合を低くみすぎていたようである。今回のレッスンでは、和声という要素を中心に楽曲分析を進めていくことと、その際の終止形の扱い方について学んだ(下田)。

私は、ロベルト・シューマン『クライスレリアーナ』作品16より「1 激しく動いて」「2 心をこめて、速すぎずに」をレッスンしてもらった。はじめに、①Schumann について知っていること、②Kreisleriana とはどういう意味かと曲の全体像の話聞いた。精神に異常をきたした作曲家はシューマン、スクリャービンなどがいるが、それに関連してかフロレスタンとオイゼビウスの2つの相反する場面がある。この2つを別々にレッスンし、それぞれの特徴をさらに深めていった。曲の前半フロレスタンは情熱的に、最後は鍵盤から指をさらうように激しく感情をこめて弾くよう御教わった。そして、私の演奏の姿勢を強く指摘され、弾き初めの呼吸をもっと深くすることで、音色が変わるのがはっきりとわかった。さらに歌い出しが丁寧になったように思う。また、打鍵した後、指を上げるのが早すぎるため、音が1音1音つながらず、スラーが生まれにくい。これは私の悪い癖で、幼いころから先生に幾度となく言われ続けていたことである。最後まで音の響きをよく聞いて、粘り強く音を拾うことを、これからさらに気をつけようと思う。

呼吸に続いて、身体の使い方について話を聞いた。音楽は全身を使って表現するものだから、もっと体全体を意識するよう指導された。深く呼吸すると同時に、ピアノと身体の距離をやや遠ざけて、広めにとる。脇を開けて程よく力を抜く。背筋を伸ばして、腰から背中、背中から頭と一本の線を通して、その線は頭の上から吊られているようにまっすぐに張らなければならないとおっしゃられた。それを意識すると、ピアノの音色がぐんと美

しく変わっていくのを自分自身で感じた。この「意識」を定着させて、自然と「無意識」に変えていけるよう心がけたい。ペダルの踏み方については、伸ばしたい音にペダルを踏むこと、そのためには、伸ばしたい音を弾いてからペダルを踏まなければならないと聞いた。テンポが速くなるにつれ、お粗末になりがちなので、一度テンポを落とし、アルペジオは和音にして和声の響きを今一度確かめて、どの音を強調しペダルで残して次へつなげたいかを、よく聴いて自分の耳で考える必要があると感じた。作曲家自身についてもっと知識を増やしたいし、シューマンの性格や特徴が音楽に表れていることを自身の演奏へ反映させたい。そして、さらに美しい音、美しい響きを作れるよう練習を重ねていきたい。

また、これは余談かもしれないが、「説明した後に、理解できたかできなかったか意思表示をはっきり示しなさい。そして、自分の意思を出してもっとコミュニケーションをなささい。」と指摘された。説明が分かっているにもかかわらずもっと優しく言い換えてくださり、これは非常にありがたいのだが、日本人はあいまいで感情を露わにしない性格であるのがよくわかった。「NO と言わない日本人」と呼ばれるが、表立って意見を否定したり事細かに物事を口に出したりしないことは、日本では一種の美德とされていて、「奥ゆかしさ」へとつながっていることに改めて気付かされた。口には出さない感情をお互いにくみ取るのが日本人の裏のコミュニケーションであるように感じた（鈴木）。

#### 9月16日（木）（スウェーデン王立音楽院スタッフアン・シェイヤ教授）

Staffan 教授でも、前回の Marianne 教授のレッスンに引き続き、和声を意識して音楽の流れを作るようにとの指摘を受けた。また、今回のレッスンでは各所にあるアウフタクトを持つフレーズの扱い方についても指摘を受けた。私は、音楽を楽節単位で考えてしまう傾向があるようで、その中に含まれるフレーズにアウフタクトが存在する場合でも、それを意識せず演奏してしまうことが多かった。このアウフタクトを意識し、次の強拍への方向性を持たせることで、このフレーズの性格を明確化し、生き生きとした演奏をすることができるようになった。

今回の 2 人の先生のレッスンを通して感じたことは、先生の言っていることがわかりやすいということだった。そのように演奏する裏づけとしての理由を明確に提示してくれるので、自分の中で納得しやすかった。もし機会があるのなら、今回提示された課題を克服した状態で、再びレッスンを受け、さらに多くのことを学びたい（下田）。

シェイヤ教授はちょうど来週の演奏会のプログラム曲だということで、はじめに一曲通して演奏され、その素晴らしさに圧倒した。「Ausserst bewegt」なのだからもっと激しくホットな感情をこめるよう強調された。レッスン中にだんだんと言葉がなくなり、言葉で説明するのではなく、先生が弾いたのを自分で耳でよく聴いて、それを真似するような形へと変化していった。言葉がないのだが、私が弾き返すと、“Good”とおっしゃって、言わんとしていることをつかめたのかな、と安心した。会話や言葉ではなく、音楽を通して気持ちが通じているのがなんだか嬉しかった。

また、クレッシェンドは強調ではないと教わった。音を際立たせて強く弾くことだけがクレッシェンドの解釈ではない。音の幅を広くするのだと分かった。そう感じるだけで、音に厚みができて、自然と曲に流れが出来てきた。今までは一つ一つを強く響かせ過ぎていて、流れが止まっていたのではないかと感じた。

一音一音の打鍵の仕方、指の上げ方から始まり、スラーの歌い方、ペダルの踏み方、音の残し方、さらには呼吸と姿勢まで、短時間の中で様々なことを教わった。基本的なことではあるけれども、すべてをこなすのは非常に難しい。一時は出来ていても体に習得させるのには長い時間がかかるであろう。

Schumann の Kreisleriana は曲名を言うたびに、「あら、素敵ですね。」と言われた。シューマンは日本ではあまり重きを置かれていない作曲家であるが、ヨーロッパではとても重要な音楽家で熱心に研究されているのが、今回身にしみて感じた（鈴木）。

## 8. イングスウンドでの活動

9月17日（金）～9月19日（日）

### FMT 音楽療法の授業見学

音楽療法自体には興味があったのだが、どのように行なわれているのかは未知の世界だった。単に音楽を聴かせたり演奏させたりするだけだろうと思っていた。しかし音楽というツールを使用してクライアントをサポートするもの、理論的に考えられて使用されていることに驚いた。コミュニケーション、信頼関係の確立の方法をよく見て、反応することで示していた。

### 民俗音楽専攻の授業見学

音楽を楽しむということを再認識させられた。誰かが歌い出すと弾く、弾き出すと同じ旋律が演奏される。音楽の掛け合いが単純ではあるがすごく面白い。

### 演奏会

終わった後、「すごくきれいな声ね」「歌、ステキだったわ。私も声楽なの」と何人かの生徒、先生から声をかけられた。ほめてもらったことが嬉しかったとともに、自分にこのような経験があまりないことを残念に思った。素直に人のよさをみとめ、相手につたえることが日本人は苦手だと思う。人をほめるのはなんだか照れくさくて抵抗があったのだが、やはりほめられると嬉しい。だから私も人を褒めようと思う。

### 学内パブ

スウェーデンの民族音楽を踊った。足がもつれそうになりながらも必死でついていった。彼らの中には音楽のリズムが染み着いていると相手になってくれた学生、先生と踊って思った。ヨーロッパの人にとって音楽は生活の一部だ、とあらためて感じた。音楽があって踊りがあって、輪になって踊ってすごく楽しかった！「アンパンマン」もかなり必死

で踊ってくれて、生徒と一体になれたように感じた。



写真 12 ピアノ二重奏

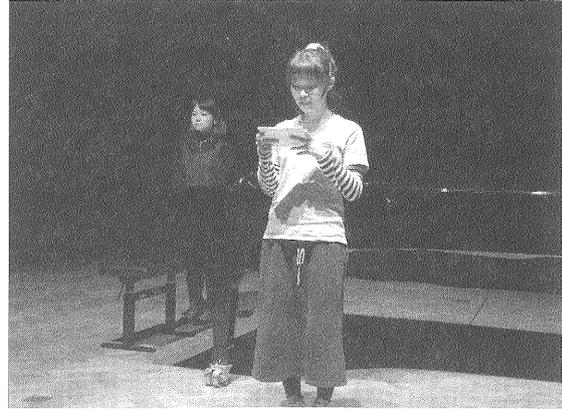


写真 13 日本の歌の解説

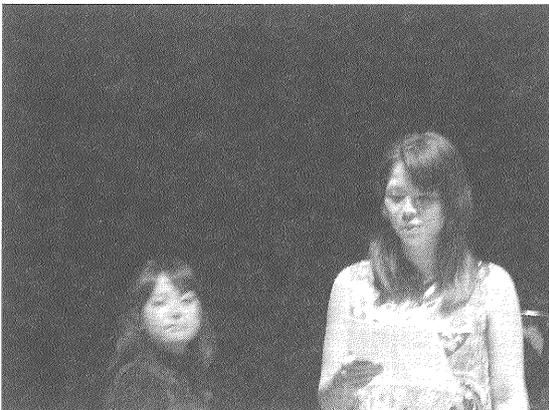


写真 14 日本の歌の解説



写真 15 篠笛演奏

## まとめ

スウェーデンの人は音楽をものすごく気楽に聴いたり演奏していたりしていると感じた。日本だと音楽の「発表会」「演奏会」というと演奏者はゴテゴテしたドレス、スーツを着て、観客も立派な服を着て気合いを入れて聴くというスタンスだ。しかし、普段の格好で、いつものことのように演奏会にでかける彼らを見ていると音楽はもっと気軽に聴きにいける娯楽なのではないだろうかと思う。日本は演奏会のための練習をしているけれど、練習のための演奏会という考えに変え、奏者が演奏会をもっと楽に考えることができれば聴衆も気楽に演奏会に参加できるのではないだろうか。

一番興味深かったのはマルメのコミュニケーション音楽学校での話。移民の多いこの町で移民はクラシックを、西洋人は他の国の楽器を弾きたがる、習わせたがるということ。日本人の親もクラシックを習わせたがる。日本音楽に興味があるのは外国人。まさに同じ。日本の音楽は何年か後には外国人の師範代だらけになってしまうかもしれない。そうなったとき

に日本音楽は、その型をどのように変化させていくのか考えると面白い。

コミュン立音楽学校では日本でもできそうだった。きっと日本は先生に給料は払ってくれないだろうけれど、もし、学生が無料で放課後の空き教室を利用して音楽を教えるとなると学校は許可するだろうか。学校は音楽を提供することができるし、学生（教育学部）であればTAをやるよりもはるかに自分の技術の向上、指導の方法を無料で学ぶことができるはずである。

スウェーデンの政治家は音楽がどんなに大切な役割をもっているかをきちんと知っているのだと思う。それは小さなときから音楽を学べる環境にあって、自分にとって音楽がどう働きかけてきたかを知っているからだと思う。子どもたちが音楽を気軽に学ぶ、聞くためには制度の改革ももちろん必要だ。でも、それよりも音楽が好きだけでなくどんなに影響のあるものかを肌で感じたオトナが増えることの方がもっと大切だと感じさせられた。

(大庭)

## 9. 報告会

日瑞音楽交流プロジェクト活動を広く周知するために、後期の授業開始後の2010年10月13日(水)、昼休みを使って教育学部E201教室で報告会を実施した。スウェーデンで活動した5人のうち3人の大学院生が、パワーポイント資料を作成するなどして現地の様子を後輩たちに伝えた。その後、参加した学生たちに感想を求めたところ、身近な先輩の海外での活動に触発され「コミュニケーションをする際の語学は、どうしたのか？」などの質問も受けた。

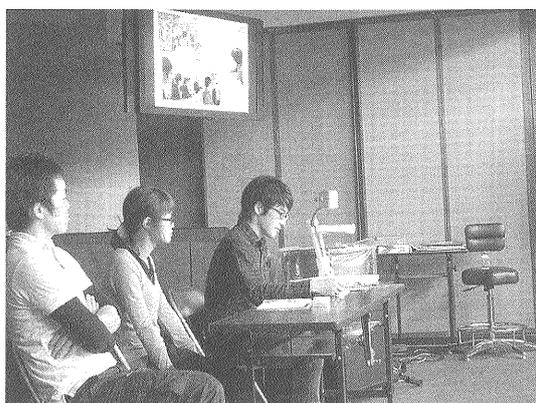


写真 16 報告する大学院生



写真 17 報告会の様子

## 10. 今後の活動

日瑞音楽交流プロジェクトとしては、来年度は6月末から7月上旬にかけてスウェーデンよりストックホルム在住のヴァイオリニストのフーゴ・ティッチアーティ氏、ピアニストのスタッフアン・シェイヤ氏、インゲスンド音楽大学よりFMT音楽療法士、民俗音楽専

攻の学生を招聘し、東京、静岡、関西でのツアーを計画している。2009年第1回目の来日よりも訪問者数の規模も専門性も広がり、また受け入れ先も関西の各大学を中心に拡大している。特に、インゲスンド音楽大学については教員養成に力を入れていることもあって、静岡大学教育学部と共通したところがある。現地の民俗音楽専攻の学生との交流を中心に、音楽の幅広い体験をより多くの静岡大学学生たちと分かち合える機会を設けたいと考えている。

(小西)

【参考資料 グリーティングカード (デザイン: 小嶋遼)】



図 1 表紙



図 2 裏表紙

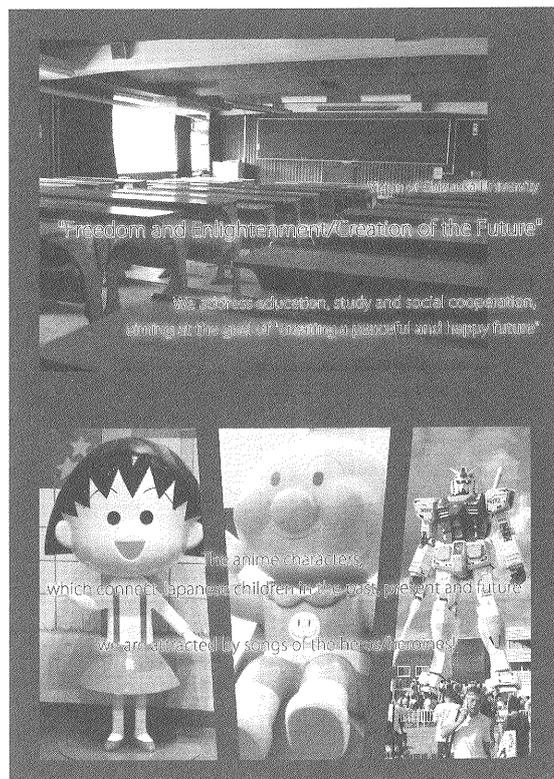


図 3 中のページ